様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　6 月　10 日現在

研究種目：基礎研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：19520173
研究課題名（和文）　『源氏物語』論―第二部、第三部の「王権」のあり方―

研究課題名（英文）　'The Tale of Genji' theory - Ideal way of the 2nd and 3rd "Royal prerogative" -

研究代表者
辻　和良（TSUJI KAZUYOSHI）
名古屋女子大学・文学部・教授
研究者番号：80217299

研究成果の概要：
研究成果としては、第二部においては第一部に見られたような直接的王権索求的展開ではなく、言わば王朝的価値観の相対化というものが進んでいること―玉鬘・夕霧などの活躍―が繋がりとして明らかとなり、第三部では、八の宮周辺で直接的な王権論物語が持ち出されようとしながら、結果的には何ら衝撃的な事も起こらず、逆に「王権論」そのものが解体される環境が整いつつある。しかし、そのこと自体が第一部「王権論」を捉え直し、相関的な視点をそこに持ち込むことを促してもいる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：古代文学

１．研究開始当初の背景

「王権論」は、いわゆる『源氏物語』正編の中でもとくに第一部において詳しく論じられてきた。

光源氏を核とした物語構造は、王統の一人子、光り輝く皇子の須磨流謫を転回点として劇的な王権奪取の話を作り上げている。

主人公の劇的な上昇物語は典型的な王権物語であるだけに印象深いものとなる。第一部で特にそれが取り上げられるのは宜なるかなである。

しかし、第二部では主題的状況が著しく変化するのに伴って、研究の主眼は王権論ではなく、六条院世界内部の人間関係、心的な問題へと移ることになる。光源氏を中心とする関係性、とくに男女関係の亀裂あるいは崩壊を主たるテーマとして取り扱うようになった。女三の宮の輿入れ、柏木との不義、薫の誕生、何をおいてもそのことを元とする紫の上の憂悶、これらは現代文学にも通じる普遍

的な文学上の課題であるとの認識は、「王権論」を後景に追いやってしまったということである。
第三部に至ると、さらに人間関係の様相に関心が移り、光源氏という中心点を失った物語世界で等身大の登場人物達がどのように関わり合っていくのか、第一部で聖なるものであったもはやそのことに触れることは考えられない状況にあると言っても良い。
本研究は、このような背景を踏まえて、「王権論」研究を始めることにした。

２．研究の目的
本研究の目的は、上記１に記した状況の中で、『源氏物語』第二部及び第三部における「王権」のあり方を研究することである。
「王権論」が登場してから、すでに久しい。しかし、第一部に孕まれた王権的諸課題がどのように果たされていくのか、あるいは果たされ切らないのか、そのことの究明はいまだ果たされ切っているわけではない。
「王権論」が『源氏物語』論として持っている可能性を追求すると共に、「王権論」そのものの可能性を考える事が求められると思う。
そのことは、今後の新たな主題を論じるためにも蔑ろに出来る事ではない。本研究を立ち上げる所以である。

３．研究の方法
次の項目に留意しながら分析していった。

(1) 夕霧世界の遠心的な世界構造を把握すること。
夕霧巻に典型的に現れる物語世界は、求心的な力学の働く第一部のような王権索求物語のありようとは対照的なもので、言わば中心を相対化しようとする遠心的な力学の働く場と考えられる。
その特色を押さえることは、第二部「王権論」の質を理解する上で重要である。

(2) 若菜上巻に記される「老」の問題は光源氏に突きつけられた直線的時間に関わるものであること。
「王権」の時間は、簡単に言ってしまえば行事を通して作り出す終わりのない円環的時間である。
だとすると、第二部においてそのような円環的時間に対立する時間、すなわち直線的時間が存在した場合、「王権論」的には重要な問題となる。
「老」のもたらす「時間」が意味するところは大きい。

(3) 夕霧巻に至るまでに記されている「光源氏不在」の巻々の存在の意義。
この項目は、夕霧的世界の延長上にある問題として考えている。物語の中心的存在である光源氏が不在のままに、物語が進められていく。光源氏の相対化と捉えて良い現象であるが、そのことは「王権論」として見過ごせない。
花散里という女性は夕霧の後見人としてあるが、彼女と光源氏との関係においてもこの主題的状況と重なるものが存在している。
このような巻々の考察は、搦め手からの「王権論」となる。

(4) 女三の宮に関わる一連の事件―結婚・「不義」―を「王権論」から捉えようとすることによって、光源氏と「王権」との距離をより正確に計測する。
これは、一連の「光源氏の相対化」の一環として位置づくものである。女三の宮・光源氏の婚姻に「王権」がどう関わっていると描かれているのか、検証する必要がある。結果的にそれが「不義」の形で裏切られていくことになるからである。
一方、柏木の行動も上の観点から検証して置かなくてはならない。彼の死をもたらしている論理と「王権」との関わり方である。

(5) 第一部との繋がりにおいて玉鬘という登場人物に注目すること。
玉鬘十帖での彼女のあり方を、若菜巻、竹河巻での役割という大きな枠組みの中で見直していく。
玉鬘は、光源氏を巡る重要な女性の一人ではあるが、その存在は単に恋愛対象の女性であるのではない。むしろ、夕霧的世界の一員として位置づく。
これまでにも論じてきてはいるが、第一部から第三部までの枠組みで捉え直してみなければならないということである。しかし、それは従前の人物論ではない。物語の人物は、主題的状況の中で、大胆にその有様を変化させている。首尾一貫した人物像を求めることはもともとできない。求めるのは、どう描き出されているか、その描出を支えている論理はどのようなものであるか、に尽きる。

以上のような観点に立ちつつ、目的を果たそうとした。

４．研究成果

『源氏物語』第二部･第三部を「王権論」という視点で一貫して考察できたことは有意義であった。上記（１．研究開始当初の背景）で述べたように、ここは「王権論」の範疇ではないかのように思われていたからである。

前項の「研究の方法」に挙げたことを進めることによって、次のような成果を得ることができた。

(1) 若菜巻での「老」問題を先鋭化しているのが玉鬘であり、夕霧世界に見えた「散文的」「遠心的」あり方の特色を、冷泉院という人物までをも巻き込みながら王朝的な価値観の相対化という、より論点を深化させて竹河巻で展開していくのも、玉鬘であったことが鮮明になった。

さらに、花散里という人物もこの範疇に入る人物であったが、一人の人物の意義というのではなく、一連の繋がりにおいてその意義が見えてきた。

これは、これまでに考察してきたものが「夕霧的世界」という補助線を引くことによって、光源氏の相対化という論理で結びつけられることが明らかになったということである。

第二部の「王権論」をさらに考えていく上で、重要な端緒となる事柄であった。

(2) 女三の宮にかかわる一連の出来事を「王権論」と直接的に結びつけて考える事が出来た。

「光源氏の相対化」という論理で見ていくと、女三の宮と光源氏との婚姻が実現していく過程に重要な表現構造が見られ、同時に登場人物間に交わされる「ことば」の連携によって、新たな現実が導かれてくるという構造も見えてきた。

一人の人物に様々なものが集中する構造ではなく、言わば、拡散する関係性とでもいうものが作り出されていることに気付いた。

(3) 「王権」そのものについて改めて考察することになった。

「王権」とは、静的なものとしてあり続けるというよりも、現実的権威（皇権）への抵抗の中で現れる（聖的な）もの、とする考えがある。

これは、「王権論」における新たな視点として重要である。『源氏物語』論として「王権論」を考えていくに際して、この「相関関係としての王権論」に気付けたことは大きな成果であると思う。

(4)「交易」について考える事は、その背後に「王権」が存在することから言っても「王権論」にとって重要である。

それは、物語世界の基盤として、経済活動がどう関わっているのか、物流そのものが物語の中に大きく取り上げられているわけではないが、物として唐物が取り上げられたりはしているわけで、看過できない。

「王権論」を追究することによって、この論点に取り組めたことは成果の一つであった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　件）

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　１件）
清文堂
『王朝物語のしぐさとことば』（共著）
（担当：「商い」の言葉P114-P122）
2008 年
総頁数 251 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

○取得状況（計　件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
辻　和良（TSUJI KAZUYOSHI）
名古屋女子大学・文学部・教授
研究者番号 80217299

(2)研究分担者

(3)連携研究者